

不登校経験者が語る“不登校経験の意味

～ “自己資源化の可能性” の提案～

松坂 文恵

．問題と目的

1．不登校問題の現在

不登校状態は、児童生徒個人と環境との相互作用から生じた欲求不和を処理する過程において、欲求不和の表現の一形態として生起するものであり、個人の心身の健康や成長、所属する家族・学級・学校・地域社会等に不利益をもたらす“問題”として捉えられている。現在、不登校人口は平成10年度より12万人以上の数を推移しており（文部科学省，2008），社会問題としての様相を色濃くする中で様々な立場の人々によって問題解決の営みが行われるようになった。とりわけ1980年代後半、フリースクールの立場より、不登校を一つの人生選択、生き方として積極的に肯定する主張がなされてからは、文部科学省による認識転換が起こるなどし（貴戸，2004），「不登校は問題か否か」という、個々の不登校事例から分離した水準の不登校問題へと移行したと考えられる。貴戸（2004）は、そのような不登校の肯定・否定に関わる論争の過熱化は“不登校は問題である”との認識だけを反復し、不登校の当事者に対する否定的評価として還元される問題意識や危機感を再生産する土壌となっている点を指摘している。不登校が本人の問題から、学校制度の問題、家族関係の問題、社会構造の問題・・・と問題の所在を拡大させていく中で、不登校という行為の主体者である本人は、行為主体であるが故にいずれの問題をも自身の中に引き入れ、自己評価を低下させる材料に変えてしまうリスクを抱える存在であると考えられる。そのような児童生徒本人の視点に立つならば、著しい身体的・精神的变化を伴う発達段階において、自己評価の低下や生活リズムの崩れなどにより心身の安定性を欠き、その中で不登校状態の原因となる環境との相互作用関係を客観的に捉えることは困難であるため、その時点における本人の力のみでは事態の解決は望めないのである。

2．当事者視点から見る，“不登校問題の解決に向けた取り組み”が含む二つの文脈

ところで本稿の筆者は、筆者自身が不登校経験者であることから、自分や不登校仲間が経験した不登校の実際に直面してきた問題と、貴戸（2004）の指摘するような論争上の不登校問題に乖離が生じていることを実感として感じてきた。また、以上のような背景を受けて行われる“不登校問題の解決に向けた取り組み”においても、そこから不登校児童生徒本人に向けて複数のメッセージが発せられていることが指摘できる。“不登校問題の解決に向けた取り組み”においては、まずそれぞれの事例において行われる、不登校児童生徒本人に対して直接的に行われる支援（学習支援、登校刺激、カウンセリング、医療といった個別的支援）や間接的に行われる支援（教師や親への支援やコンサルテーションなどによる関係調整、環境整備）が挙げられる。また、それらに加え、一つ一つの事例を離れて行われる、学校全体や教育制度上における対応方針の検討作業や多様な学問領域において行われる調査・研究活動（実態調査、要因

検討, 治療・心理療法・活動プログラム等の効果検討, 他), 講演や書籍出版等による言説活動もこの“取り組み”の範疇に含まれる。これらの活動は, 理論生成と実践活動の循環構造を構成している相補的な関係にあることが考えられるが, その一方で不登校児童生徒本人にとっての悪循環構造となっていることは上に指摘した通りである。このような当事者視点に写る問題構造の二重化を背景として行われる“不登校問題の解決に向けた取り組み”は, 不登校児童生徒本人に対して二つの文脈を提示していることが考えられる。

第一は“適応の文脈”であり, 「不登校児童生徒の不登校状態の解消が, 非当事者が目指す不登校問題の解決や利益のための手段となっている文脈」であると考えられる。貴戸(2004)が指摘するような「社会構造の見直しではなく, 個人の生を修正する」管理的発想に基づく対応方針を唱える文部科学省, 同様に不登校を進路の問題, 次世代の社会構成員確保の問題として捉える社会学者の主張は, この文脈の意味合いを多く含んでいることが推測される。居場所関係者による不登校を生き方の一つと捉える主張においても, 限られた「成功した不登校者」の存在が主張の裏付けとされているが, 不登校による不利益に苦しむ当事者が陰に置かれてしまう構図は, そのような当事者よりも主張の正当性を重視する姿となりがちである。親の立場においても, 「子どものため」と思っている行動が, 実は親自身の心理的安定のためであったと気付くこともあり(小野, 1993), 親自身にとっての問題解決を目指した働きかけが行われてしまう場合のあることが挙げられる。医師による治療行為も, 治療を受けさせる主体である親の意志を尊重する場合があります, 親が持つ意図を反映してこの文脈を取ることが想定される。実践の場においても, 学校や学級全体の問題解決として不登校児童生徒に対応する職員やスクールカウンセラーが, 本人と周囲の関係性を考慮した上で学校や教員の立場を優先して考える際の対応が, 時にこの文脈に当てはまる瞬間があるのではないかと考えられる。

第二は“育ちの文脈”であり, 「不登校児童生徒個人の人的発達成長を促進するために, 不登校経験と回復過程をその手段とする文脈」として位置づけられる。この文脈は, より当事者の視点に立脚し, 利益を尊重する姿勢として考えることができる。不登校の心理臨床の場で, 「本人に寄り添うこと」「本人の視点に立つこと」の重要性が訴えられてきたが, そもそもその目的は個人の人的発達成長を促進するところにあったと考えられる。その意味で, 不登校児童生徒への支援の場は成長に向けた肯定的なメッセージが送られるべき場であると考えられる。

ところが, 個人の発達成長が起こる場には, 個人を取り囲む環境である家族や学校, 社会のそれぞれが目指す解決へ向けた意図が張り巡らされている。当然ながら個人の発達成長と環境は相互作用を起こすが, 互いの影響関係がその時々で状況で変化するため, 例え同じ行為を選択する場合であっても, その時々によって文脈がどちらかに偏ったり, 同時に提示されたりすることが考えられる。それぞれの立場の人がそれぞれの意図を持って取り組んでいるため, 相互作用の中においては複数の文脈が存在していることこそが普通であるとも言える。しかし, 個々の事例に反映される“不登校の解決に向けた取り組み”として考えるならば, 文脈の混在による悪影響が少なからず存在していることが想定される。特に不登校児童生徒本人と接する人々にとって, 無意識的にこの二つの文脈を行き来してしまうことは, 不登校の解決に向けた児童生徒との協同関係の構築を阻害する要因となる場合が考えられる。特に, 不登校状態の本人に最も近い位置で支援を行う親にとっては, この二つの文脈の混在こそが内的な葛藤そのものであるとも考えられ, 不登校児の親の変化過程は“育ちの文脈”を確立するまでの過程として言い換えることができると考えられる。その他の援助者に対しても, どのような意図を持って接近してくるのかを, 児童生徒本人は直感的に判断しているのではないかと推測される。

また個々の不登校事例が持つネガティブな側面を“不登校”の一言に集約している現状は,

不登校についての知識が少ない人々に不登校に対する偏見を持たせやすく、不用意な働きかけを促進する影響を持っていることが考えられる。笠井（2000）が行った調査では、不登校児童生徒を対象としたキャンププログラムの前後で、教員や学生ボランティアで構成されるスタッフにより評価された不登校児童生徒の印象が、ネガティブなイメージからポジティブなイメージに変化している。笠井は、学校での児童生徒の様子から形成されるイメージが、一面的な関わりにおいて作られた危険性があると述べているが、度重なる問題の反復によって作られた一般的な不登校イメージも、共同体験前の不登校児童生徒への評価に影響を与えていた可能性も多分に考えられる。不登校について認識が低く、ネガティブなイメージを強く持っている人々（特に教員や家族、友人など近い立場の人々がそうであった場合）が発する何気ない言葉や態度によって、いとも簡単に児童生徒の状態悪化を招くことが予想される。

では、このような不登校児童生徒本人と周囲の非当事者による不登校を通じた営みを前提として問題解決を考える場合、どのような方向性を考えるべきであろうか。単純に不登校を肯定するか、否定するか論考を展開するのでは、“問題”の反復にしかかなり得ないという点が懸念される。貴戸（2004）は不登校の当事者に肯定・否定の判断を委ね、個々人の意味づけを尊重してはいるが、不登校の渦中にある当事者にとっては、その二項対立だけでは推し量れない問題であることが言え、不登校経験の意味づけが変化する可能性や、その時々の意味づけがその後の人生に対して持つ発展可能性を捉えていく必要があると考える。以上のように不登校の問題解決に向けては否定的評価が送り続けられる悪循環を抑制し、児童生徒が自律でき、自身の人生や成長に対して主体的に取り組めるようになる相互作用のあり方を模索する必要があると言える。

3. 不登校経験の“意味”の取り扱い

本研究では不登校経験者が自身の人生に対して不登校経験がどのような意味を持っていると考えているかを捉えていくが、その上で“意味”を理論的に説明しているナラティブ・アプローチとロゴセラピーの立場についてレビューし、本研究における“不登校経験の意味”について整理する。

（1）ナラティブ・アプローチにおける“経験の意味”

松下（2007）は、White（1995）の「人は『経験』から『意味』を、『意味』から『行為』へ、そして『行為』から『経験』を、という循環のなかに生きている」という説明を挙げ、社会構成主義の流れを組むナラティブ・アプローチにおいて、人が生きていく中で遭遇する様々な経験を積極的に解釈し、意味づける存在であることが重視されていると示した。ここで言う“意味”は個人の認識の枠組みによって組織される“経験の意味”であり、それはごく主観的な意味であることが言える。また個人の認識に基づいて形成された“経験の意味”は、その人のセルフ・ナラティブを裏付けるストーリーの一つとして補完され、“私”という首尾一貫性を支える働きを持つとされている（松下，2007）。

（2）ロゴセラピーにおいて価値化されている“人生の意味”

ロゴセラピーはオーストリアの精神科医であるフランクル（Frankl, V.E）によって創始された心理療法であるが、それは心理治療の技術である以前に人間の生き方を説く思想であるとされる（勝田，2008）。「人間はどんな状況の中にあっても常に意味を求め存在である」という基本的な観点から人間を捉えるロゴセラピーにおいて“意味”は人間の行動や態度を方向づけ

ている志向性や、志向の対象である価値の存在として説明されており、その理論を支える中心的な概念となっている。フランクルは“意味”について、それが客観的なものであり、それは全ての人間にとって共通する人道的な意味であると述べ、またそれは自分以外への志向性を持ちうるものであると説明されており（勝田，2008）、責任や良心といった人間特有の価値体系を持っていることが言える。そのため、ナラティブ・アプローチにおける“経験の意味”と比較すると特定の価値体系を持った狭義の意味である“人生の意味”として取り扱われていると考えられる。

（3）本研究における不登校経験の“意味”の位置づけ

二つの理論においては、いずれも人間がものごとから意味を創出する能力を持ち、また意味を通して自身が生きる現実を構成し、その方向性を定める存在であることが共通して示されている。“意味”について対比するならば、ロゴセラピーにおける“人生の意味”が個人の経験の総体である自己物語が持つ一定の志向性を指すのに対し、ナラティブ・アプローチにおける“経験の意味”は一つ一つの経験が“人生の意味”に対して持つ影響・役割を指す言葉であると整理できる。

また“経験 意味 行為”の循環において過去経験の振り返りや未来展望といった時間的展望（都築・白井，2007）が行われる点、意味を創出する言語行為が「身体性を備えた行為」（河合，2001）である点などを考えると、経験の意味づけに時間性や身体性が深く関連していることが指摘できる。それらを踏まえて、“人生の意味”は「身体を通しての関係性体験の集積に基づいて構成される自己物語（人生）を、現在時点を基点に過去と未来の両方向へ展望を広げ、照合することによって決定される、その人が目指す志向性や現在を生きる態度を言語化したもの」、 “経験の意味”は「過去を構成している経験の中の 하나가、自己物語 や 人生の意味 に与えている影響、またはそれに対して持つ役割」であると捉える。二つの“意味”は互いに影響関係にあるが、次々に来る現在のその時々状況によって内に含まれる価値体系が消失したり、修正や転換が図られることによって新たな価値が付与されたりと、多様に变化していく可能性を持っていると考えられる。以下では、不登校経験の意味を“経験の意味”として位置づけ、経験者の現状やこれまで積み重ねてきた経験の総体としての人生に対して不登校経験が持つ影響・役割であると捉える。

二つの“意味”は、未来に向けて現在の行動や態度を方向づけるものであるが、個人にとっての“人生の意味”の実現に向けて行動する主体にとって、“意味”に適う行動をし、態度を取るということは非常に主体的な行為であり、その行為者は“意味”に由来する主体的な感覚を体験していることが推測される。その人にとって生きやすい、もしくは意味のある認識枠組みを持って現状を捉えられた時、それは困難に苦しむばかりの状態とは異なり、現状を生きる主体者としての感覚を強めていることが予想される。Hermans（1999；松下，2007）は、ある“経験”をめぐって自分に“強さ”を感じるか、“他者との親密さ”を感じるかといった自己に対する評価感情（自己感情）を見ることによって、自己物語を明らかにしようとしているが、ある一つの“経験”を経た当事者が、自分や、自分と他者の関係性に対する感情に基づいた“強さ”の実感や、“他者との親密性”の実感を感覚として持つことが想定されている。このような感覚は、ある“経験”を自身の身体を持って経験した当事者は、その“経験”に“意味”を見出すことによって得られる主体の感覚ではないかと考えられる。それは、Hermansの示す“強さ”や“他者との親密性”だけでなく、経験を乗り越えてきた身体において感じられるような前概念的な感覚を含むものであるとも考えられる。そのため、本研究で取り扱う不登校に

置き換えるならば、不登校を経験し、乗り越えた当事者によってのみ感じられる“実感”がある可能性として言い換えることができると考えられる。それは特に、不登校を経験し且つ不登校の不利益を所々に感じつつも、現在状況としては社会適応的な水準で過ごすことができている当事者により持たれやすいことが想定される。

4. 本研究の位置づけ

さて、以上のような不登校現象に見る問題と不登校経験の意味づけが持つ可能性を踏まえると、研究はどのようなあり方をすべきであろうか。不登校による不利益に困難を覚える人の存在を否定できない社会的な現状を見ると、研究活動がそのような不登校を生きる困難さを軽減させるために用いられるべきであるのは当然であるが、不登校像の多様性や個人差を考えると、不登校問題における全ての当事者の世界観が漏れなく表現されるということは不可能であり、その行為が非常に限定的なものにしかかなり得ないことが指摘できる。また不登校経験者のそれぞれが、個別の不登校を経験し、個別の不登校後を生き、その時々での状況での評価を行っており、理論化が困難な事象であることも問題である。

しかしながら、生活において不登校が占める割合、不登校後に受ける不登校の影響が大きい人ほど、自己を構成する経験の中の「不登校」の要素が大きくなり、「不登校を通じて大人になる」という発達過程に意味合いが近づいていくことが推測され、そのような経験者によって不登校経験が言語化されることは、不登校問題の解決や予防の策を考える上では非常に意義深いデータとなり得る。不登校の最中にあった時には言葉にできなかった感情や自身の状態を、その後の経験によって獲得した言語によって説明されるという点は、援助者による援助効果を向上させる上で有益な情報となり得る。不登校の早期解決や教室復帰を急ぐのではない、不登校を通じて成長する発達過程を考慮した援助を行うために、ある人にとっての不登校経験の肯定・否定から不登校を問題化するのではなく、不登校経験をいかにその人の人生に生かすことができるかを考える必要がある。

宅(2004)は「ストレス体験と自己成長感をつなぐ循環モデル」を提示し、ストレス体験について、ストレス体験に引き続いて生じるネガティブな結果をいかに緩和・低減させるかという視点のみでは不十分であり、ストレス体験にはそれを覆すほどの自己成長感への寄与がもたらされる可能性があることを指摘している。そこではストレス体験と自己成長感の螺旋を描きながら成長していく人間像が示されており、ストレス体験が成長途上の側面として位置づけられることを説明している。

以上を踏まえると、不登校を個人の成長の途上段階の一つとして捉え、それが本人の人生にいかに取り込まれていくかに焦点を当てることによって、不登校の否定的側面と肯定的側面の両立を図り、不登校を通して生きていく個人の生を考える土台を創出することができるのではないかと考えられる。これは、現役の不登校児童生徒にとっても、自分の現状から考えられる未来にいかなる不利益が存在するのかという不安を煽るだけの知見ではなく、不登校体験を通じていかに自分が成長できる可能性があるのかということを示す知見になり得ると考えられる。未来の不利益を意識しながらも現状が持つ意義を意識できるという点から、不登校者がいま・ここにおいて主体性を持って生きるために有効なデータになることが期待される。

本研究では、様々な不利益を被る可能性のある不登校を通じて成長・発達を遂げていく側面があることを踏まえて、「どのような不登校経験が、どのように経験者の人生に取り込まれているのか」を調査することから、不登校の経験がその後の人生においてどのように生かされる可能性があるのかを検討する。最終的に、不登校を「生き方」として提示できない人にとつ

ても不登校を経験したなりの発達成長があることを認め、不登校の経験が自身の一部を成すものとしてその後の人生における経験資源としての位置づけることのできる「不登校経験の自己資源化」の可能性の提案を模索する。

・ 調査概要

1. 調査対象

義務教育期間において不登校を経験した13名の不登校経験者（男性2名、女性11名）を対象にインタビュー調査を行った。対象者の選定においては、語ることの安全性に配慮する観点から、より比較的社会適応水準が高いと予想された対象者に限定して依頼を行った。対象者の年齢は10代後半～20代中盤であり、高校生（7名）、大学生（2名）、大学院生（1名）、社会人（3名）が含まれる。個人差はあるが、不登校期間は1年半～6年に及ぶものであった。また不登校を経験した年代は1990年代から2000年代中盤までの間であり、インタビュー調査は不登校を終えてから1～7年程度経過した時点で行われた。

2. 手続き

まず調査者（筆者）より、調査者自身も不登校経験者であることを開示し、研究の趣旨説明を行った。インタビューに関しては、答えづらい質問には無理に答えなくて良いこと、いつでもインタビューを中止できること、個人情報取り扱いに関する配慮、インタビュー内容の録音のお願い、について順に説明し、全てに同意を得られた状態で調査を行った。インタビューにおいては、時系列を整理できる表を用いて不登校経験の経過を視覚化し、調査者と対象者の間での共有を図りながら、半構造化面接の形を取った。

3. 質問項目

インタビュー調査に用いた質問項目（表1）は、インタビューを進めるにあたっての安全

表1 インタビュー調査に用いた質問項目

①インタビューを進めるに当たっての安全確認
・このインタビューを受けてますどう感じたか。
・不登校の状態にあった頃について思い返すことはあったか。
・過去を振り返ることは大丈夫か。距離を取って見れるかどうか。
②不登校の経過を表すための質問群
・不登校経験のあらまし。いつ頃からいつ頃まで学校に行かなかったか。その後の経過はどうか。
・どんな出来事が印象に残っているか。
・自分に変化を感じるか。感じるとすればいつ頃、どのように変化したか。
③不登校経験の意味づけを尋ねる質問群
・不登校経験の意味づけ方のタイプ（松下、2005；松下、2007に項目を加えて利用）
・不登校経験は現在の自分にどんな影響を与えているか。
・不登校経験に対する見方の変化はあったか。あればいつ頃、どのように変化したか。
・不登校をしなければわからなかったこと、知り得なかったこと、できなかったことなど不登校ならではのものは何か思いつくか。

確認を行う質問群，不登校の経過を表す質問群，不登校経験の意味づけを尋ねる質問群であり，過去経験について語る心理的負担に配慮する流れを組んだ。において意味づけを尋ねる際には松下（2007）の「ネガティブな経験の意味づけ方のタイプ」を補助的に利用した。不登校経験がネガティブな経験ではない対象者がいる可能性を踏まえ，追加項目を作成し，過去・現在・未来のそれぞれの時制において最も当てはまりの良い言葉を選んでもらい，意味づけを探る手がかりとした（表2）。

表2 調査対象者に選択してもらった不登校経験の意味づけ方のタイプ
（松下，2007に項目を追加して利用）

意味づけ方のタイプ	過去	現在	未来
苦悩継続型	辛く苦しいもの	辛く苦しいもの	辛く苦しいもの
未来希望型	辛く苦しいもの	辛く苦しいもの	乗り越えていきたいもの
忘却楽観型	辛く苦しいもの	辛く苦しいもの なんともないもの	忘れていくもの
成長確認型	辛く苦しいもの	成長させてくれたもの	だいたいなものであり続ける
その他	上記以外のもの		
	※追加項目（意味づけ方のタイプや時制に関わらず、当てはまるものを選んでもらった。） 辛さ・苦しさ楽しさの両方があるもの 何ともないもの 楽しいもの・良いもの		

・事例紹介

以下では，インタビューを行った13名中3名の事例を取り上げた。掲載に際しては調査対象者のプライバシー保護のため，差し障りない範囲で内容を修正している。

1. Aさん（20代・男性）の事例（表3）

Aさんにとっての不登校経験は“他者との見比べ”“コンプレックスとの戦い”の歴史として言い換えることのできる経験として考えられた。自己と他者を見比べる基準は，小・中・高校においては“学力”，大学においては“対人関係能力”であり，現在も尚その見比べによって，自身と自身の過去を肯定しきれないでいるAさんの姿があった。

しかしながら，インタビューの中では，Aさんがそのような自身の特徴について，客観的に捉えることができていたと考えられる。また，楽しい高校生活を送ったことや，大学で自身と同じく不登校である人と接した経験から，不登校経験を肯定することができる見方や，経験が他者に向けて生かされる可能性のあることが見出されていることがわかる。特に教室復帰時や高校受験時期における努力や熱意については，教室復帰状態を維持できなかった，高校で浮き沈みを経験することになったといった結果にも関わらず，「目標のために頑張った経験」として肯定される対象となっていた。Aさんへのインタビューからは，対人関係能力の低さとして不登校による不利益を実感せざるを得ない現状にあるものの，それを引き受けながら自己肯定しようとするAさんの現在が明らかになったものと考えられる。

ただし，Aさんへのインタビューにおいては，Aさん自身も理由づけができていない部分につ

通じて、過去経験の否定的側面を相対的に減らす役割を担っていたことが考えられる。そのため、インタビューの仕方からする点を割り引いても肯定的な役割を果たす意味づけであると考えられる。

2. Bさん(20代・女性)の事例(表4)

Bさんの不登校経験は、小学校時代の教師の存在によって植え付けられた、学校に対する恐怖反応を克服するまでの過程として語られた。不登校初期においては、スクールカウンセラーの配置等、不応への対応や理解が不十分であった年代に不登校を経験したことにより、Bさんの気持ちを汲んで関係調整に取り組んでくれる大人が周囲におらず、Bさんは自分でも原因のわからない不登校状態を続け自身の人生をあきらめてしまっていた。

そのような状態で自宅を中心とした生活を3年近く続けたBさんにとって、適応指導教室での活動は、「淡々とした楽しさ」のある日常や時に失敗や苦痛に立ち向かわなければならない経験を提供してくれた。特に、適応指導教室では様々な問題を抱える通級生徒との関わりを体験するため、Bさんは同じ不登校仲間との交流しながら、「あの人がこういう風に感じ取る」、「この人はこういうことで傷つくのか」、「なぜこの人はそう言ったのか」といった人間観察を行い、「どう話したら伝わるのか」など、問題解決や付き合い方を深く考えていたそうであり、その後Bさんの中で確立していく他者や物事に対する許容的な見方の基盤を作る経験になっていたと考えられる。

高校進学後は、教師、教室、授業といった学校刺激に再び曝されることにより、心身共に過度の負担を受ける苦しい時期であったようだが、最初のテストで好成绩を収めたことをきっかけに学校に対する恐怖感を克服できたという。辛い時期でも高校に通ったことについては「自分で進学することを決めたから、やめたくなかった」とする強い気持ちがあったためであると語り、高校進学を主体的に選択したことがその後のBさんを支えていたものと解釈される。

Bさんはインタビューの中で、物事に対する見方や態度、対処法などの側面において不登校期間中の経験が生きていることや、苦難の経験をしながらも充実感のある社会生活を送ることができている実感を「何でも大丈夫だ」という言葉で持って意味づけ、説明していた。そのような自身の変化を振り返り、不登校経験の意味づけ方のタイプの質問においては“成長確認型”を選択し、「貴重な経験をした」と肯定的な意味づけをしていた。またそのような実感を持つ現在に至るまでには、不登校以外にも「いろいろあった」と苦難の経験の存在についても触れており、不登校経験は現在の自身を形成するに至った「たくさんの出来事の中の一つ」として他の体験と相対化されていることが考えられる。

3. Cさん(高校生,女性)の事例(表5)

Cさんは高校生であり、Aさん、Bさんと比較すると不登校を終えてからの年月が短い点が特徴的である。現在は不登校を経験した生徒を積極的に受け入れている高校に在学しており、「同じ境遇だった」仲間と良い関係を築き、充実した高校生活を送っているようである。インタビューにおいては、不登校期間中におけるネガティブな体験と、高校に入って一変した生活、自分自身といったポジティブな側面について語られた。

不登校期間中の経験としては、不登校に至った経緯やフリースクールに通った時期があること、ひきこもり状態であった時期の様子、高校進学を決めた後に別室登校をしたことなどが語られた。ひきこもり状態の時期においては、両親に叱責を受け、自分でも「学校に行かなきゃ」という漠然とした思いを持って過ごしていたそうであるが、強制的に学校に連れて行かれた出

る。昔の事を思い出しては落ち込んでしまう、ということも度々あったそうであるが、学校外にも対人関係を広げる中で“不登校の自分”ではない“今の自分”が他者から認められる経験をし、不登校をした自分に対する見方を変えることができたとのことであった。

不登校経験の意味づけに関しては、現在では成長確認型が最も当てはまりが良いと回答した。過去を思い出して辛くなるという側面を残しつつも、それを経たことにより現在の良い自分になれたため、「成長させてくれた」という側面が見出せたとのことであった。現在のCさんにとって、不登校経験は友人との“共通点”であり、且つ“自分に近い人が同じ状況になった場合の向き合い方に役立つ”という生かされる可能性を持つ経験として捉えられており、それが不登校経験を“大事なもの”として説明する根拠となっていることが考えられた。また、このような意味づけに至ったのは最近のことであるとのことで、“自然に整理がつく”状態に至るためには、登校復帰を果たすだけでは困難であり、肯定的な対人関係の中で新たな経験と時間を重ねる必要があることが考えられた。

． 考 察

1. 「どのような不登校経験が、どのように経験者の人生に取り込まれているのか」

今回の調査対象者が経験してきた不登校期間における体験は、不登校をせずに過ごした者では体験することができない内容を含むものである。「学校に行きたくない」という登校拒否・回避感情はほとんどの児童生徒が多かれ少なかれ抱く感情であるが(滝川, 2004), 不登校状態になる児童生徒本人においては他の児童生徒との間に「登校 不登校」という明確な差が体験されると考えられる。同様に、それ以降の経験(例えばひきこもり状態の経験, 居場所経験, 学校復帰など)においても不登校ならではの性質を備えた経験がなされたと考えられ、そのような性質は調査対象者の語りにも表れていた。また、その不登校経験は対象者の人生に対してどのような意味・役割を持っているのだろうか。

(1) 不登校状態に至る際に感じられる自他の相違

まず、上述したように、不登校時においては自他相違感が経験されていたことが考えられる。それは不登校の背景要因や不登校状態への至り方(徐々に休みが増える, 突如不登校になるなど)の差は見られるものの、不登校傾向が見られる以前の時期や休みがちの時期, 不登校状態に至った後の時期など、いずれかの時期において経験されていた。事例で取り上げた3名においては、3名それぞれが学校に通うことの価値を内在化していたことが窺え、自身の現状と同級生との間に「登校(行かなければならない学校に行く・行ける) 不登校(行かなければならない学校に行かない・行けない)」という差異を見出すことで、自己評価を低下させていたと考えられる。

(2) 自宅での生活における苦楽

また、学校に行か(け)ない間は自宅での生活が中心となる時期が見られ、その時期の生活においては、家族からの評価や本人による自己評価によって「不登校状態が問題であること」が反復される“苦痛”と、教師や同級生がいて授業を受ける必要がある学校に行かないことで身体的・精神的な負担が軽減される“楽”が同時に経験されるという特徴が見られた。また、家に居て特別何をするでもない、または自分の好きなことばかりする、といった生活において

は、生活リズムや活動のめりはりをつけることが難しく、宙に浮いたような感覚が経験されることが考えられた。しかしながら、身体的・精神的な“楽”を過ごすことで、次なる居場所経験や学校復帰に向かうためのエネルギー回復を図るという機能を持つ時期であることも確認された。

(3) 自宅外の居場所における経験

自宅外の居場所経験としては、適応指導教室、民間のフリースクール、NPO法人が経営する居場所といった学校外の居場所と、別室、相談室、保健室といった学校内の居場所が挙げられる。学校外の居場所経験においては、学習支援や日常生活支援の他に、体育館や調理室などの設備を活用した活動プログラム、キャンプや社会見学といった移動教室などの取り組みが行われており、学校内の教室よりもより多彩な活動を提供する機能を有していた。一方、学校内の居場所ではより学習支援に特化した活動が提供されており、受験が意識される中学校3年生においては高校進学のための準備活動のために利用される傾向が強いと考えられた。また、いずれの居場所での経験においても、“同じ境遇にある仲間”、“不登校に理解を示す(否定的評価を下さない)指導員・教師”との交流によって、不登校状態への否定的評価を含まない対人関係が経験されていたことが挙げられる。中には居場所内の対人関係に躓き、居場所に通えなくなるという経験も語られたが、不登校への否定的評価を含まない対人関係経験と、その中で積み重ねられる様々な活動に従事する経験の両方が整うことによって、本人による主体的な活動参加が促進されていたと考えられる。

このような対人関係と活動経験は、調査対象者においては“肯定的な変化のきっかけ”として捉えられていたことが言え、否定的評価が本人へと還元される悪循環を抑制する働きを持っていたものと考えられる。特に不登校状態に至る際に対人関係性のトラブルを経験した者にとっては、その経験の後に結ばれる対人関係の良好さが変化のきっかけとして重要な位置づけを得ていると考えられる。

(4) 登校復帰時の壁

登校復帰時に体験される“壁”の存在もまた不登校ならではの経験の一つであると考えられる。本研究における調査対象者は、いずれも小・中学校在籍時や高校進学時において教室復帰を果たしているが、在籍校や転入先の中学校への登校復帰に挫折してしまったり、復帰後の学校生活において負担を感じたりするなど、いくつかの“壁”を経験したことについて語っている。まず、不適応を起こす形で長期間に渡り学校生活から離れていたことにより、“規則に従って行われる集団行動に対する不慣れ”が生じ、周囲に合わせて時間割をこなす学校生活を送ること自体が大きな負担と化していたことが言える。また“同年代の人との対人関係の構築・維持”も課題の一つである。新しい対人関係をスタートする高校進学時においてもそうだが、特に在籍校や転入先での教室復帰を果たす際には、ある程度クラス内のグループが形成されている中に馴染む必要があるため、時間割に沿ったそれぞれの活動に対処しながら関係を形成していくという高度なスキルが求められたものと考えられる。同様に“学習の進度”が登校継続を阻害する主要な要因となり、授業内容のわからなさや周囲について行けない状況の認知がストレスとなっていたことが考えられた。復帰初期の対人関係が形成されていない時期においては、上手く人に頼れない状況があることも指摘できる。

このように、～ に挙げた内容は相互に影響し合い、総合的なストレスとして作用するも

のであると考えられる。そのため、教室復帰をしたばかりの児童生徒においては、学校生活における諸々の活動に対して通常登校が可能な児童生徒とは比べものにならないほど心身を消耗しやすく、ただ席に座って時間を過ごすことですらも多大な苦痛を感じていたと推測された。

(5) 不登校経験による弊害と利益

個人差は見られるものの、以上のような不登校経験を受けて、現在ではどのような影響を受けているのだろうか。まず、最も憂慮される不登校による弊害という点では、対象者の語りから学力低下と内申点の低下に基づく進路選択の幅の縮小、対人関係の構築・維持の苦手さが経験される点が確認された。については、今回の調査対象者の内、中学校時代に不登校を経験している者においてはそのほとんどが極端に少ない選択肢の中から高校進学を決定していた。またについては、経験者それぞれが元々持つ特性に加え、集団活動や対人関係経験の少なさによって生じるものであることが考えられる。

一方、不登校経験を経て得られた利益としては、不登校を経た後に獲得された肯定的な結果（良好な対人関係や努力の成果、成長感）、特別な経験をした実感、などが挙げられる。

は「良い友達や先生と出会えてよかった」というように、不登校になったからこそその出会い、関係を結ぶことができた対人関係の存在や、不登校になったからこそできた活動、努力の成果、浮き沈みを乗り越えてきた自己に対して感じられる成長感、といった肯定的な結果を指す。いずれもが“不登校にならなければ存在しなかったもの”との意味づけ・説明により、不登校がもたらした利益としての位置づけを得ていたと考えられる。または、不登校にならない多くの人が経験し得ない特別な経験をした、という不登校経験者が持つ経験的な価値の存在を示している。今回の調査対象者においては、例えば「自分も不登校にならなければ学校に行けなくて悩む人の気持ちなんて考えられなかっただろう」、「身近な人が不登校になったときに共感できるだろう」というような見方の変化の実感、経験が生かされる可能性の認知など、実際に経験しなければわからないこと、できないことが見出されていた。それらは多くの人が容易には得られない、意義のあるものとして捉えられていたものと考えられる。また、特別な苦難を乗り越えた経験を経たことによって、様々な人生の困難に対する対処可能感の増大を実感する対象者も見られた。例えばそれはBさんの「何でも大丈夫だ」との言葉に表れていたが、不登校に次ぐ困難や苦勞を乗り越える毎に確立されていく感覚であったと考えられる。

さて、以上のような“弊害”と“利益”が生じる段階について考えると、不登校を経験することによる“弊害”は、不登校経験に先立って存在するのに対し、不登校を経験することによる“利益”は不登校状態に至った後に、多くの浮き沈みを経験する過程において徐々に形成されていくものであることが考えられる。そのため、不登校状態にある段階においては“弊害”以外に肯定的な側面があることは見出しにくく、そのために不登校中における自己肯定感の創出が困難になっているものと考えられる。また今回の対象者が不登校後に一定の社会適応水準に到達している特徴を持っていたために、“利益”に関する語りも多く見られた可能性も指摘でき、不登校後もより社会不適応的な生活を強いられている経験者においては、以上のような“利益”は構成されにくいものであると推測される。そのため、不登校経験がもつ“弊害”は、不登校経験者が自身の人生を肯定する過程を歩んでいく上で付き合っていかなければならない壁であることが考えられる。

しかしながら、不登校経験に与えられる“経験値”は辛い経験を含む過去が肯定することのできる価値を内在していることも指摘できる。今回の調査対象者によって語られた不登校経験の経過においては、浮き沈みにおける“沈み込みの幅”が大きかったからこそ、沈み込みの底

辺から浮上する際の“伸び幅”も大きくなったことが示されていたと考えられる。そしてこのようなマイナスの状況からプラスの状況に転じる際の“伸び幅”において“肯定的な変化”や“成長”が位置づけられており、“弊害”が目立つ不登校経験においても“意味”が見出されていたものと考えられる。

(6) 不登校経験の意味

これまでの考察を踏まえると、本調査の対象者においては、不登校以後の生活を送る中で過去経験がもたらした利益を見出し、弊害と利益を並置させることによって、弊害による問題化を防ぎ、不登校経験を人生の一段階として位置づけることを可能にしていたと考えられる。それは、否定的側面と肯定的側面を合わせた総合的な評価であり、不登校期間におけるネガティブな経験に対して否定的評価を残したままでありながらも、それを経て到達した現在を肯定することができるという道筋があることを示している。

このような不登校経験の意味づけは、新規の経験を積み重ねる度に、過去、現在、未来への時間的展望を繰り返し、“過去経験の総体である自己物語”と“人生の意味（時間的展望を通じて決定される志向性）”の修正がなされる過程の一段階として捉えることができると考えられる。その時々における不登校経験の意味は、現状と照合した上で不登校による利益と弊害のどちらが焦点化されるかによって変化し、それはコインの裏と表のどちらを見ているかの違いであると捉えることができる。そして利益の側面と弊害の側面のどちらの面が見えているかによって、自己物語の形成や、それに基づく人生の意味の創出に影響を及ぼす程度も変容すると考えられる。そのため、不登校経験の意味づけは多様に变化していく可能性を持っており、一概に肯定しきること否定しきることできないことが言える。本研究の対象者において見られた意味づけは、そのコインの裏と表の両方があることを認識していく中で、そのような経験を持つ自己が現在以降の時間をどのように過ごすかという選択を繰り返す中で落ち着きを得たのではないかと考えられる。

2. 児童生徒本人と非当事者の不登校を通じた取り組み

不登校問題に対する取り組みとして、不登校状態の解消を図る取り組みが当事者のその後の人生において受ける不利益を減らすこと、学校で学習を受けることで向上維持される学力がその人の人生の選択肢を増やすことはその通りであるし、それを支援していくことは意義深いことであることに変わりはないと言える。しかし、だからといって不登校を経験しなかったり、早期に不登校状態が解決されたりすることによって、その人の方がより人間的に優れた発達・成長をするだろうという説明にはならないと考えられる。その点で、短絡的に“弊害を取り除くことが不登校児童生徒の利益である”とする支援姿勢は見直されるべき側面を持っていることが指摘できる。

それは“不登校問題の解決に向けた取り組み”における二つの文脈（適応の文脈と育ちの文脈）に該当する内容であり、本研究における調査対象者においても、内在化した適応への価値追究と主体的な育ちの狭間で滞りを経験していたことが見て取れた。そこでは“行けなさ”との葛藤に疲労しながらも、非当事者により解決を要請され、期待やプレッシャーに尚葛藤を深めてしまう悪循環があったものと推測される。不登校状態の生起と解消がいずれも児童生徒個人と環境の相互作用の結果であることを考えると、不登校状態に陥ってしまった児童生徒に対して、不登校状態を解決しようとする働きかけがどのようなメッセージを送っているかについてよく配慮する必要があると考えられる。

そのため、個々の不登校事例に取り組む働きかけの担い手は、その時々状況によって個人と環境の相互作用の中にどのような文脈が流れているか、その流れの源流でどのような価値観が流れ出ているのかを読み取る感覚が求められるのではないと思われる。また、その流れの中から、当事者にとっての自己成長を図る上で、不登校を経験することの価値や、社会に適應するという価値がいかにか本人の発達成長を方向づけるかについて考えた上で、相互作用関係の調整がなされることが望ましいと考える。

3. 自己資源化の可能性

不登校経験については必ずしも全てが肯定的に評価できるものではないという、否定的な諸側面を残していることは確かだが、そのような否定的な側面と付き合いながら生きていくからこそ、それを残したまま何かを達成することに付加的な価値が生まれるのではないかと考えることができる。それは「不登校であっても である(ができる)」,「不登校であったからこそ である(ができる)」という言い方でもって語られた、不登校のマイナス面を前提とした価値提示の手段であり、不登校を経験した当事者ならではの自己肯定の回路として当事者が主体性を持って生きていくことを支える役割を果たすものであると考えられる。社会の現状としては、不登校を肯定することに懸念が示される側面も多く見受けられるが、不利益を被る当事者が自身の人生を生きる上で積極的になされて良い主張のあり方ではないかと考えられる。

以下ではこれまでの考察を踏まえ、不登校問題の悪循環において見られる当事者に向けた否定的評価の還元を抑制するために、否定的な価値が与えられやすい不登校経験を、何か生かされる方向や手段を持つ“資源”として捉えていくことを提案する。

“資源”としての捉えは、不登校による不利益の提示が不登校状態への否定的メッセージを含むのに対して、“不登校であっても が可能”という肯定的なメッセージを含む考え方であると言える。これを調査対象者が語ったような不登校経験から現在に至るまでの過程、努力、考え方など、実際に不登校経験を乗り越えてきた人々の経験談を“効果的に”用いることで、否定的な将来展望への偏りから起こる自尊心の低下を抑え、児童生徒が主体性を持って物事に取り組むことを支援できるのではないかと考えられる。同時に、周囲でサポートを行う支援者による否定的評価の発信を抑え、本人が否定的評価とは切り離された環境で物事に取り組める状態に導くことが、肯定的な変化の創出を促進するのではないかと推測される。

このような認識を用いた支援は、不登校問題に取り組む各関係者、不登校状態を示す不登校児童生徒に対して適用可能であると考えられるが、児童生徒の主体性に対して効果的に働きかけるためには、その提案を担う者の特性や提案を行う時期には適切性が求められると考えられる。例えば、不登校傾向が見られ始めた際など、初期対応・即時対応が求められる時期においては、不登校経験を通じた利益を取り上げることで、行き過ぎた見守り対応や援助者側の初動を遅延化させることが起こり、問題を長期化させる可能性がある、受験時期においては、進路が不透明な状態にある際の児童生徒に対して過度に不安感を与える危険性がある、児童生徒の内面への受容・共感が不十分であると、見放される感覚を与えてしまう、または支援者の不安解消を得るためだけの関わりに終わってしまうという危険性がある、などといった失敗のケースが想定される。

以上のような場合をふまえれば“自己資源化の可能性の提案”の利用可能性を高めるには、不登校状態が長期化し、ある程度心理的に安定している児童生徒に対して、学期末や学年末などの進路や今後が意識される時期に“不登校経験が今後どのような位置づけを得ていくのか”という可能性を提案することが効果的であると考えられる。例えば、第一段階として、本研

究で紹介したような不登校経験者の経験談を、あまりに美談化しすぎたり、辛さを強調しすぎたりしない形で資料化し、不登校から学校復帰や進学、就職までの道程を掲示、もしくは自由に閲覧できる場所に設置することで児童生徒が“能動的な興味を持って眺めることができる環境”を整え(いきなり援助者が「こんな人もいる」と提示すると、「あなたもこうなってみてはどうか」「こうなるべきではないか」という侵襲性のあるメッセージとして受け取られる可能性がある)、第二段階として、面接場面や雑談場面の話題(進路、困り事、暇を持てあまして、など)に応じて“共に資料を眺める”関わりを持ち、第三段階として、学期末、学年末といった進路に直面し、将来の可能性を展望するというニーズが発生した時にやっと“あなたの経験は今後どのような可能性を持つのか”という提案が効果を発揮するのではないかと推測される。このように、順をおいて提案することが、将来を過度に楽観視させるでもなく、かといって不安を煽るわけでもない力加減を保つ要因になると考えられる。

4. 今後の課題

まず、本研究の調査対象者が社会適応水準の高い者であったことにより、収集データが偏っていた点が懸念される。安全な調査を行うための配慮を尽くしたことによる結果ではあるが、不登校の多様さを補うには不十分な対象設定であったかもしれない。また、本研究においては、インタビューから得られた知見を実践場面でいかに役立てるかという側面については実証的な効果検討にまでは至っていない。そのため、効果検証に基づく有効な活用方法の検討が課題として残る。今後は不登校児童生徒、不登校経験者と直接関わり合いを持つ実践者による効果検討が望まれる。

謝 辞

本研究におきましては、インタビュー調査の実施にあたり、調査対象者の皆様方を始め、調査対象者の方々をご紹介頂きましたK高校の先生方には多大なるご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 小野 修 1993 不登校児の親の変化過程仮説：パーソンセンタード・アプローチ 心理臨床学研究 第10巻 第3号 17-27.
- 笠井孝久 2000 不登校児との共同体験による不登校児イメージの変化 千葉大学教育学部研究紀要 第48巻 教育科学編 221-229.
- 勝田茅生 2008 ログセラピー入門シリーズ1 フランクルの生涯とログセラピー システムパブリカ
- 河合隼雄 2001 事例研究の意義 臨床心理学第1巻第1号 4-9. 金剛出版
- 貴戸理恵 2004 不登校は終わらない「選択」の物語から<当事者>の語りへ 新曜社
- 滝川一廣 2004 新しい思春期像と精神療法 金剛出版
- 宅香菜子 2004 高校生における「ストレス体験と自己成長感をつなぐ循環モデル」の構築 心理臨床学研究 第22巻 第2号 181-186.

都築学 白井利明 2007 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版

松下智子 2007 ネガティブな経験の意味づけ方と自己感情の関連 ナラティブ・アプローチの視点から 心理臨床学研究 第25巻 第2号 206-216.

文部科学省 2008 平成20年度学校基本調査速報 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/09/010999a.ht